



ウォルター・クレイン 「長靴をはいた猫」 1874年 個人蔵



館長のつれづれだより

みんなで一緒に美術館を楽しむ工夫

お話しするタイミングを逸してしまい、もはや旧聞に属すことになってしまったかも知れませんが、昨年の4月ごろから暫くの間、JR総武線や京成本線の車内に、美術館に展示されているルノワールの絵の前に座り込み、熱心にその絵の説明を聞く子供たちの様子を捉えた、東京六本木の国立新美術館で開催する「ルノワール展」のポスターが貼られて（あるいは吊られて）いたことをご記憶の方もあると思います。

展示された作品を前に、引率者からの話を聞き、自分の意見を快潤に述べ合う子供たちの姿を、またあるいは展示された美術品を前に鑑賞の感想を話し、互いに意見を求める紳士淑女たちの姿など、欧米の美術館をお訪ねになったことのある皆さんならばしばしば目にする機会のある光景だったことを思いだされるでしょう。

前にも書いたことがありますが、わたしが美術史を専攻する学生であったころ、指導教授から「君たち、展覧会は一人で見るのも良いが、それより人と一緒に行って、展示されている作品を目の前に、そこで感じたこと、気付いたことなどを皆で話し合うのが重要なだよ。そうすることで、作品から受ける感動や理解を自分のものとする事が出来るのだよ」と、しばしば説かれました。

芸術作品を静かに鑑賞したいと思うのも当然で、それがむしろ正しい美術に対する接し方かもしれません。しかし、作品を目の前にしてそこから受ける感動や歓びを、率直に傍にいる人に伝えること、また傍にいる人が感じたこと、その人の知るところを聞こうとするのも、美術館の展示室で芸術作品を鑑賞する態度として決して間違っているとは言えません。ですからわたしは千葉市美術館で、「わたしたちの美術館では、展示室で展示作品を前にして話をすることを禁じてはいません」というのです。

最近の美術館では、「そこにいる人の話す声がうるさい」、「静かに展示品を見たい」という来館者からの要望に神経過敏になっているのではないかと思います。美術館が「市民のためのもの」、「来館者に対して開かれたもの」であるなら、展示室で作品を前にして、作品から受ける感動や感想を「話す」という権利も与えてください」とわたしは声を大きくして言いたいのです。

「うるさい!」と言う来館者に、事を大きくしない配慮から、触らぬ神に祟りなしの喩に従って、「只今、お客様からお申し出がありました。展示室ではご静粛に願います」などと、館内全体に響きわたらんばかりの放送を流す美術館管理者の無神経さには、ただただ呆れるばかりで



vol. 81

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

[編集・発行]
〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8 TEL. 043-221-2311
FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
http://www.ccma-net.jp/
[発行日] 2017年3月25日 [印刷] 株式会社恒陽社印刷所

特集1 「絵本はここから始まったー ウォルター・クレインの本の仕事」

担当学芸員に聞きました
～BIBからクレインまで、絵本の魅力に迫ります。

特集2 ■ 美術館イベント報告 さや堂ホールへようこそ！

連載 ■ 館長のつれづれだより
ボランティア日和

■ 2017年度 展覧会のご案内

2017.4.5(水)～5.28(日)	絵本はここから始まったー ウォルター・クレインの本の仕事
6.7(水)～7.30(日)	歿後60年 椿貞雄 師・劉生、そして家族とともに
8.5(土)～8.27(日)	CCMAコレクション いま／むかし うらがわ
9.6(水)～10.23(月)	ボストン美術館所蔵浮世絵名品展 鈴木春信
11.3(金・祝)～12.17(日)	没後70年 北野恒富展
2018.1.6(土)～2.25(日)	小沢剛展(仮称)

てはならないでしょう。譲り合いの精神、他の価値観や他人の生き方を認め合う心を持つ、成熟した社会に育てて行こうというような話は良く耳にします。ところが何事にも、上述のような強い不満をもつ一人の人間の主張がまかり通ります。それは病んだ現在の日本の一面を映し出しているようにも見えます。美術館は社会的には、未だ小さな存在です。しかし、美術・芸術には、情操を徳育するという重要な責めを負わされています。その意味において、いま流行りの「おもてなし(自分の身を処する)」のこころも、人に迷惑を掛けない、他人を思いやるという譲り合いの精神に基づいているのですし、またその意味では、美術館の利用を通して、そうしたものが育まれる可能性は十分過ぎるほどにあると思います。

市民の、観覧者の皆さまとともに歩むことを目指す千葉市美術館を、そのような理想の美術館のための実験的な場として活用頂けるならば、みんなで一緒に楽しもうという美術館の在り方もそこに現れて来るように思えます。一層のご支援をお願い申し上げます。

[館長 河合正朝]

す。こんなこともありました。展示室での会話を防ぐために、展示室を出た場所にソファを置き、セルフサービスのお茶の用意までして、会場を出た観客たちが、その日の美術鑑賞で得た感動の余韻と一緒に語り合える場を提供しているのだと思えるにもかかわらず、何人かの中年のご婦人グループが談笑していると監視員がやって来て、「お客様から、お一人で静かに窓外の景色をご覧になりたいとお申し出がありましたので、お静かに願います」と注意するではありませんか。一体これはどうなっているのでしょうか。

展示室内での私語に関する苦情については、多くの美術館・博物館でも、ほぼ一様に悩みの種になっているようで、それぞれに相応の工夫をされています。先日、わたしは美術館・博物館などが集まって運営の問題を討議する会議で、上記のようなことを発言したのですが、「困っています」、「でも結局」、それぞれの「モラルの問題ですね」という返事が戻って来るのが、いまのところこの類いの話し合いでの接点のように思えます。

美術館はみんなのもの、みんなで享受し、楽しむものであれば、その使い方も美術館職員も含めてそれを利用するみんなで考えて行かなく

ウォルター・クレインの本の仕事

2017年4月5日[水]—5月28日[日]

担当学芸員に聞きました！

～BIB からクレインまで、
絵本の魅力に迫ります。

担当学芸員：山根佳奈 聞き手：磯野愛

一冊として完成する絵本を意識して作ったのは、クレインが最初と言われているんですよ。

ウォルター・クレインの展覧会って、珍しいんじゃないですか？

そうですね。国内でのまとまった展覧会は、たぶん初めてだと思います。クレインの名前を知っている人がどれだけいるのだろうかと、準備をされていて不安になることもありました（笑）。もちろん、クレインの作品が日本で展示されたことがないわけではなくて、ウィリアム・モリスやラファエル前派関係の展覧会には、何点か出てくことも多いですね。日本では壁紙などの室内装飾デザイナーとしての仕事の方がよく知られているのかもしれませんが。クレインは子どもの本のイラストレーションや挿絵の分野ですばらしい仕事をしています。もちろん、子ども向けの絵本だけでなく、大人向けの挿絵本も。いずれにしても、モリスのケルムスコット・プレス本の挿絵は別として、これだけ本の仕事をしていたというのは、なかなかまとまって紹介される機会はないと思います。話は逸れますが、展覧会のポスターやチラシに『美女と野獣』（図1）の見開き画面を使っています。まもなく実写版の映画が公開されますね。

そうですね！「美女と野獣」はアニメも含めてこれまで何回か映画化されていますが、クレインの「野獣」は、歴代野獣たちの中では実際の動物にいちばん近い気がします。

イノシシっぽいですよね……。

イノシシそのもの（笑）。さて、クレインに話を戻しましょう。年表を見ると、絵本の仕事は本当に彼が若い頃からですよ。

1845年に生まれて13才で木口木版の工房に入って。彫版師のエドモンド・エヴァンズと出会って、二人が最初のカラー印刷のトイ・ブッ

クを出すのが1865年ですね。絵本の仕事自体は、後年まで続くわけですが。

ウィリアム・モリスと知り合いになるのはもう少し後、絵本の仕事始めてだいぶ名前が売れてきた頃ですよ。

1871年に、モリスだけでなく、画家のエドワード・バーン＝ジョーンズや建築家のフィリップ・ウェブと出会います。ラファエル前派的な中世趣味だけでなく、モリスからは社会主義思想の影響を大きく受けることになります。クレインは後年、デザイン理論・教育と社会主義の普及にかなりの時間を割いています。今回の「絵本はここから始まった」というサブタイトルですが、今日的な意味での絵本、それまでももちろん絵入りの本はあったわけけれども、見開きページの中に絵と言葉が一体となってデザインされ、ページをめくっていくことで一冊の絵本として完成することを意識して作ったのは、クレインが最初と言われているんですよ。いわゆる画家として挿絵を提供するだけでなく、本全体を見通して描き、デザインしたわけですよ。

面白いと思ったのは、複製印刷技術が発達していくにつれて、トイ・ブックに取り組んでいた頃の見開きのおもしろさがなくなってくるという話なんです。

それはすごく皮肉な話ですよ。写真製版によるカラー印刷の技術が進んで、最終的には、画家が描いたイメージが本当にそのまま印刷できるようになるわけです。今では当たり前なんですけれども。最初の頃は、下絵を木口木版に起こしていたわけで、挿絵画家と彫版師が二人三脚で画面をつくりあげていく。木口木版にしても、リトグラフにしても、それぞれ技法の特質として得意な表現と難しい表現があるわけです。だからそこに、最も効果的な表現を考えながらページとしてデザインするという感覚があったのだと思うけれど、描いたものがそのまま、色も筆致もなにもかも再現されてしまうとしたらそんな工夫は必要なくなりますよね。

版画としての面白さ

美術館から離れると、本好きにとってのクレインは、やはり子どもの本の画家というイメージが強いかもしれません。ケイト・グリーンナウェイ、ランドルフ・コールデコットとともにエヴァンズと組んだ3人の画家の最初の人物として、とても魅力的な作品を残していますよね。そのおもしろさって、何でしょうか。

1876年までの約10年間、クレインはトイ・ブックの仕事に取り組むわけですが、そこには、初期の実験的な、つまり技法の制約あるいは特質あつての工夫、多色刷りの木版画の面白さというものを理解した上で描いた絵のおもしろさがあると思います。当館でも、近代版画の作品をご覧いただく機会が多くありますが、あえて版画にするおもしろさって、ありますよね。

なるほど。制限される中での試行錯誤の面白さというのがあるんですね。用途にあった表現というか。

デザイナーですからね。文字と絵（装飾）の調和というのは、トイ・ブックに取り組んでいた頃から、ずっとクレインが大切にしてきたことでした。19世紀も終わりに近づくと、ウィリアム・モリスのケルムスコット・プレスに代表されるプライベート・プレスが出てきます。書物というものが、人々の関心事となっていたともいえるでしょう。

ちょっと話が前後してしまいますけど、逆にこれだけの緻密な作品を見て、これがまさか木版だと思うだろうかと、驚きがあります。あまりにも細かいし…、木口木版だからこそ可能なのだとは思いますが。あの美しい色も。千葉市美術館では今までも、浮世絵であつたり近代版画であつたり、「版」に関してはかなり紹介してきていて、そういう流れで今回の展覧会を見るというのも一つの新しい見方ではないかな、と思ったりしたんですね。

浮世絵は板目木版で、ある程度版木の面が大きいけど、柔らかい。木口木版はツゲとか堅い木を木口に切って使うので、小さいんです。版木

をいくつかまとめてボルトで締めて、バラバラにならないようにして使っていたようです。日本の浮世絵は水彩で手摺り、それに対して、トイ・ブックはインクで機械刷りです。

インクなんですか！だからこんなに違うんだ。パキッとして。やっぱり、硬質なイメージがありますね。浮世絵が植物由来の染料を使って瑞々しい印象なのに対して、やっぱり西洋のものっていうのはどちらかというと油っぽくてちょっと重たいようなイメージがある。

初期のトイ・ブックは、8ページ立ての簡単な絵本でした。最初はベタッと刷るものだから、裏写りしてしまって、裏面は何も刷れない。

両面刷りはできない？

両面刷りができるようになったのは、クレインがトイ・ブックの仕事を辞めて、別の挿絵画家ランドルフ・コールデコットが引き継いでからだといわれています。キーブロック（主版）を黒からセピアにして、カラー画面の裏にもセピアでドローイングを刷るようになりました。クレインは黒を色として積極的に使ったのも特徴で、ベタとした黒い線が印象的な作りだったけれども、コールデコットは柔らかな漫画のような線で、色刷りの裏面にもドローイングを入れています。それで、本として全ページがつながるようになりました。

さっき、黒い線っていう話が出てきましたけれども、浮世絵からの影響というのものもあるそうですね。

輪郭線や構図などに影響が見られます（図2）。画中に浮世絵が引用されている作品もあります。これはクレインだけというより、当時の室内装飾の流行を反映しているといえますね。クレインの手元にあったとされる版本や自著への引用についても、今回紹介します。

ところで、トイ・ブックって、当時いくらくらいだったんですか？

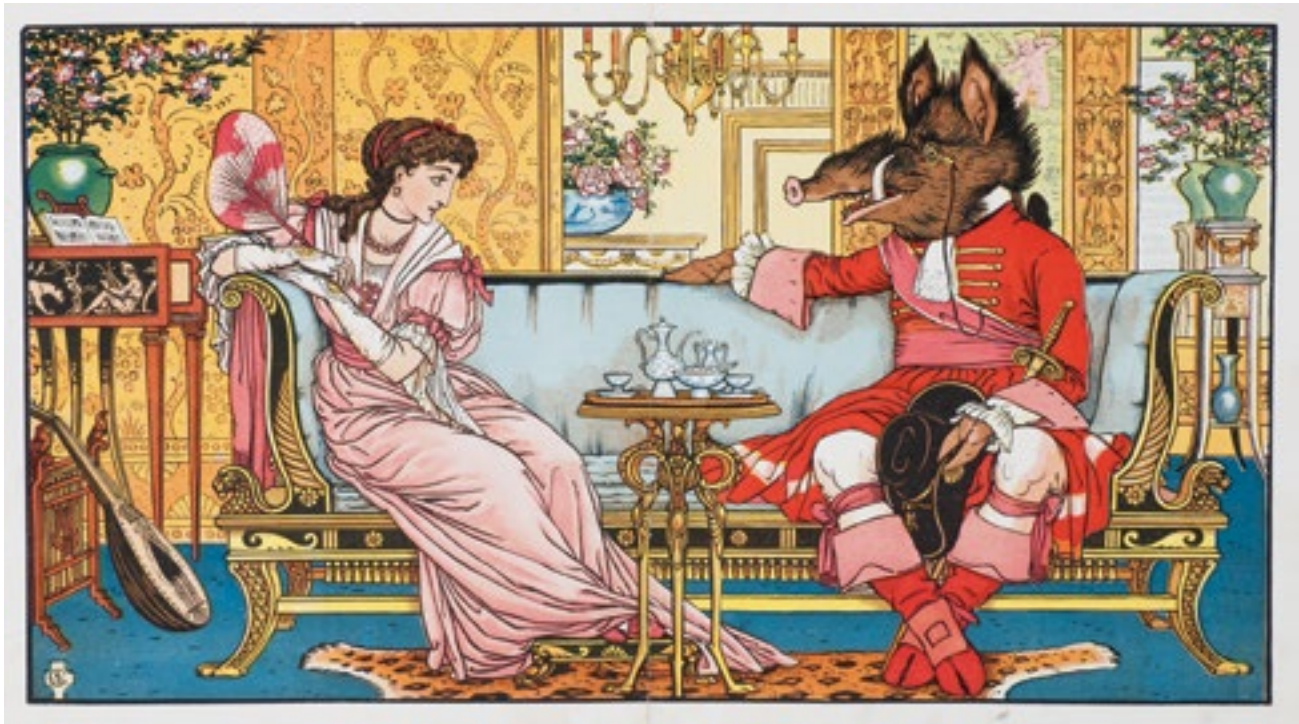


図1：『美女と野獣』
1876年（初版1874年）個人蔵



図2：『妖精の船』1871年（初版1870年）個人蔵



図3：『眠り姫』1876年 個人蔵

1865年にラウトリッジ社から出した6ペンス・シリーズは今でいうと500円くらいの感覚でしょうか。その2倍の1シリングで売られたシリング・シリーズが続きます。比較的安価なもので、たくさん作られ、評判が良いと再版されたり、合本になったりしたようです。そうやってどれだけ売れても、クレインの収入にはならなかったようで、それがトイ・ブックの仕事を離れた一つの理由とされています。

面白いですね。印刷技術が発展すると量産できるから、というもあるけど、どこの国でも安価で庶民が手に入れやすくなっていきますね。それまでの絵本はモノクロ？

単色か、手彩色でしたね。当時は子どもの労働者が色を塗っていたようです……。

ああ……。トイ・ブックの成功は、当時の需要もあったんでしょうね。

子どもに本を買いあたえるという文化が育ってきたのでしょう。それと、やはりエヴァンズの力は大きいと思います。彫版師のエヴァンズは出版プロデューサーでもあったので、今何が求められているのか、どう売り出せば良いのか、つねに考えていました。クレインが当たると、画家の名前を出して、「ウォルター・クレインの絵本」として売ったり。クレインは木口木版の工房で修行していたから、版の特質などもよく分かっていました。それがエヴァンズにとっても好都合で。クレインが描いた下絵を、エヴァンズが版画にするわけです。浮世絵もそうだけれど、どうやったって下絵どおりにはならない。

ならないですね。

ならないのだけれど、クレインの魅力は何かっていうのを考えてエヴァンズは版画にする。クレインらしさというのが、どれを見ても、同じ顔、同じスタイルで出てきますよね。やっぱり、下絵どおりにはならないからこそ、何を魅力として抽出して、どうプロデュースするかという力が、すごく大きかったんだと思います。

絵本の歴史、150年。

それって面白いですね。先月末まで「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」(BIB)も開催していました。絵本が続くというか……。

絵本の歴史150年! (笑)
クレインとエヴァンズがトイ・ブックに取り組んだ頃から、印刷技術は進歩を重ねてきましたが、そういった技術とイラストレーションのつくり方・デザインのあり方はとても関係が深いものです。クレインの時代も今も、それは変わらないのではないのでしょうか。現代のイラストレーターは、デジタルもひとつの技法として、やはり自分の中に捉えていて、それも全部使ってできる表現というのを考えているわけですよ。クレインも、木版、リトグラフ、写真と技法の変化に応じて、それぞれにあった描き方を試みているように思います。そして、おそらく今の絵本作家も、手の届く限りの様々な手段を取り込んで、自分の表現したいものに、いちばんふさわしいかたちを考えているのではないのでしょうか。
絵本原画展は、一時デジタル技法が出てきて、つまらなくなるかのように思えました。手描きの味わいを感じられなくなるという意味では、確かにそうかもしれません。でも、見開きや一冊の本をデザインしていくことと、手描きかどうかは実は関係がないわけです。また、エヴァンズにからめて、印刷の段階を考えてみると、何を魅力として捉えてそれを引き出すべきかというのを、やっぱり現代の絵本作りでも考えています。技術の進歩でできることが増えれば、それに従って視点も変わっていきます。

それは結局、ある意味本になることっていうのを前提としているからですよ。とはいえ、実際、原画には原画の良さっていうか力強さっていうものもありますけど。

仮に原画として出されたのが、デジタル出力の最終形だったとしても、そこに行き着くまでの仕事というのがあるんですよね。それを見たい、と思ったのが今回のBIB展の特集展示(*1)へとつながっていききました。

絵本原画展を見に来てくれた方に、さかのぼってクレインをみていただくと、絵本をめぐるあれこれ、いろんな問題も出てくるし、印刷ってことに関してもやっぱり興味を持つだろうなと思います。

絵本が大事にしてきたことって何なのかなということも考えてみたいです。それこそクレインの文字と絵の、装飾の一致というところから始まって、見開きをひとつのデザインとして考えるという意識は、今でも大事なことでしょ。この場面、めくってさあ次はどうなるか、など、やはり絵本はそこから逃れられないわけですね。

「春を寿ぐ 所蔵浮世絵名品展」の方でも版本が出ていました。ページをめくってお話が進んでいきます。これまでの展覧会から、関連性をもって見てもらえるのもいいですね。秋には、錦絵の創始者鈴木春信の展覧会(9月6日より開催)もありますし。
ところで、浮世絵もそうだけれど、絵本って残っていないものも多いのでは？

そうですね。残ってても状態が(笑)。ページが外れていたたり、落書きがあったり。たくさんつくられたけど、それを作品として取っておこうとは思わない。そういう意味では、今回ほぼ全てのクレインのトイ・ブックがそろっているのは、本当にすごいことだと思います。

日本だと、絵本といえば昔話とかですが、どんな内容が多いんですか？

マザーグースが多いでしょうか。日本人にはあまり親しみがないかもしれませんが。あとはアルファベットを覚えるための唄とか、お勉強みたいなものもあれば、「クリスタルパレスに行きました」など、中産階級の家庭を描いたものもあります。

よく知られた数え唄や物語も多いです。「長靴をはいた猫」(表紙)は日本でも馴染み深い話でしょう。「三匹のクマ」といえば、BIBでも出ましたね。現代版の『マーシャとくま』(*2)はとても面白い話になっていましたが、もともとは古典的な物語です。「シンデレラ」「眠り姫」(図3)や童話もあります。

しかし、画面がぎゅうぎゅうしてますね。隙間恐怖症みたいな…絵を大きく見せたいっていう心理なのかどうかはわからないけど、余白っていうものがあまりない。

そうですね。やはり、画面を装飾で構成しよう、埋め尽くそうという感じにも見えるかもしれません。

ただ、全く構成が崩れてないところがすごいなと思います。

クレインの代表作の一つとして、「フラワー・シリーズ」と呼ばれる一連の作品があります。『フロラの饗宴』(図4)など、花の画家という呼び名にふさわしい、華やかな作品もたくさんあります。これは余白多めで軽やか。

春にふさわしいですね。4月からの開催で本当に良かった。女性に好まれそうだなと思います。

原画展もそうでしたが、デザインや、イラストレーションをやってる今の若い人たちにも見てほしいと思っています。

あと、版好きにも！

「絵本の歴史150年」(*3)。かなり間をすっ飛ばしてはいますが(笑)150年のこの先がどうなるのかなと考える意味でも、今回の展示は面白いと思います。

近年、紙の本が廃れると言われつつ、それが逆に紙媒体で勝負するというきっかけになったところもあります。

手元で見る、めくるということへの欲望が多分今あるんでしょうね。本と身体の関係。肌触り。画面だけでは、電子書籍や電子絵本だけでは満足できないものがあるわけでしょう。その魅力とは何かということも考えたいです。

今回現物をみることでその魅力に気付いていたけるとうれしいですね。

*1 「ブラティスラヴァ世界絵本原画展 絵本の50年 これまでとこれから」(会期:2017年1月4日～2月26日)では、受賞作品の一部についてはその制作背景もあわせて紹介している。

*2 レナーテ・ヴァッカー『マーシャとくま』(BIB2015 金牌受賞作品)

*3 BIB展のタイトル「絵本の50年」にからめて。



美術館イベント報告

さや堂ホールへようこそ！

さや堂プロジェクト コンタクト・ゾーン vol.1

植松琢磨 星のみかた
What people do for astronomical observation?
会期：10/15(土)～10/30(日)



「星のみかたーWhat people do for astronomical observation?」インスタレーションの様子 ©Takuma Uematsu courtesy of Yumiko Chiba Associates

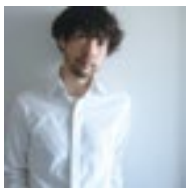
「さや堂プロジェクト コンタクト・ゾーン」は、さや堂ホールを舞台に、芸術と異分野との接触を通して作品を制作・展示するという試みとして始まりました。今回は、作家が以前より関心を寄せる「宇宙」をテーマに、国立天文台の協力を得て、作品制作の場を設けました。自然科学として長い歴史をもつ天文学と、同様に最も古くから人々と共にあった芸術との間に共通点を、あるいは違いを発見することで、新たにどのような作品が生まれるのか。その制作過程を含め、期待が高まるばかりでした。

国立天文台でのリサーチを続ける中で、宇宙の彼方での出来事について考え続ける人々や、彼らの思いが詰まった計測機器、それを未来につなげようとする人など、多

くの出会いが生まれました。様々な対話を通して感じられたのは、宇宙という壮大な対象を見つめる人々の眼、もっと見たい、知りたいという想いが、最先端の科学の背景にあるということでした。芸術においての「見る」ことが自ずと想起され、「星のみかた」という展覧会タイトルが生まれました。

最終日には、作家によるギャラリートーク、宇宙科学研究者と作家との対談を開催し、作品制作の経緯や今後の展開について、領域を超えた対話を試みました。異なる専門分野、価値観や考え方が行き来する中で、宇宙とアート、科学と芸術、あるいは自然と人間といった、いくつもの領域を分かち境界線はどこにあるのか、そのあり方を改めて考える機会ともなりました。

植松琢磨 1977年金沢生まれ、大阪府在住。国内外の美術館やギャラリーで作品を発表。自然科学や哲学における興味から、人と動物、人工と自然、意識世界と現実世界など、一見相反する事柄の共通項や境界を探りながら、生命への新たな視点を様々なメディアと手法で表現している。



今回の展示は、ホワイトキューブでのそれとは違い、空間自体が時間の流れを強く意識させるものでした。これまでの制作スタイルと違った姿勢で挑んだ映像作品は、国立天文台でのリサーチをもとに、美術における熱、運動といった切り口で撮影。天体観測のための施設とそれを取り囲む自然、そのいずれにも現れる生の確かな存在感を、偶然性を包括した有機的なプロセスで観察。一方で、メインスペースに展示した、境界のありかを考えたスペースコロニーの作品は、世界の始まりを知るために宇宙の果てを探る天文学の命題とコンセプトを交錯させながら、未来と過去、マクロとミクロを行き交う視点の散歩を楽しみました。

全てが生き物のように。奇しくも、美術館の方々が連日空気を入れ、膨らんだりしぼんだりするバルーン素材のスペースコロニーの光景は、生物、自然、宇宙の呼吸のようでもあり、彫刻ながら時間を孕んだ映像的な記憶として残っています。

【植松琢磨】

千葉市美術館 1 階に残る、クラシカルな空間。1927 年に建てられた旧川崎銀行千葉支店の建物を復元保存した「さや堂ホール」を、皆さんはご存知でしょうか。前面に柱を並べた独特の建築様式はネオ・ルネサンス様式と呼ばれるもので、千葉市内に現存する数少ない近代建築物の一つです。

この場所を、美術館が主体となってさらに活用すべく、夏のイベントとして定着しつつある「美術館で緑日気分!!」に続き、秋には「植松琢磨 星のみかたーWhat people do for astronomical observation?」を、冬には「usagingen の映像と音楽のライブショー」を開催しました。今をときめく若手作家らによる表現を軸とした二つの試み、そこから見えてきたさや堂ホールの魅力について、アーティストからのコメントも交えてご紹介します。

【学芸員 畑井恵】

さや堂ナイトプログラム

usagingen の映像と音楽のライブショー

12/17(土) 18:00 ～ 20:00



「usagingen の映像と音楽のライブショー」開催の様子

usagingen のライブシネマパフォーマンス公演に加え、今回は、食やアートに関わるイベントを中心に地元で活動する方々の協力を得て空間づくりを行いました。石畳の、いつもは静かでひんやりとした印象も受けるさや堂ホールが、子どもから大人までわくわくできる空間へと早変わり。usagingen デザインによるポスターやオリジナルウサギキャラクターが、実に 100 名を超える観客の皆さまをお迎えしました。

トークショーやマーケットも楽しみながらの 2 作品公演。リアルタイムに創り出される映像は、さや堂ホールの白い壁、大きな柱や天井にまで拡がり、自作の楽器による音楽がそれらを包み込むように反響し、空間すべてが一体となって、独特の世

界に皆が引き込まれていくのを感じました。公演の合間には、世界各地を旅してきた usagingen のお二人から、これまでの経験や、オリジナルの投影機や楽器についてのお話が聞けたりとお楽しみがいっぱい、あつという間の 2 時間となりました。

さや堂ホールの多様な表情、空間としての新たな魅力を発見すべく、これからも様々なパフォーミングアーツをご紹介します。今回は、ダイナミックな映像と音楽をよりよく楽しめる環境ということで、日が落ちてからの時間にイベントを開催しました。千葉市美術館では、展覧会会期中の金曜・土曜に、夜 8 時までの夜間開館を行っています。夜の美術館に親しむ機会としても、今後の企画にご期待ください！

usagingen 自作の映像機と楽器を使った、映像と音楽のパフォーマンスユニット。音楽祭、芸術祭、映画祭や学校教育機関などで幅広く活動を続け、これまでに、ドイツ、イギリス、フランス、イタリア、カナダ、ロシア等 20 カ国 50 都市で公演。アナログとデジタルを独特の手法で組み合わせたパフォーマンスは、各国で高い評価を得ている。



日本では珍しいネオ・ルネサンス様式の空間、壁や大きな柱にも映像を投影しました。全体が包まれる立体感のある演出は、さや堂でしかできない表現で、貴重な体験ができました。

建物と私たちの作品、出店された方やお客さんも含めて特別な空間、時間だったと思います。楽しいイベントというだけでなく、皆さんが美術に触れる良い機会に繋がったのではと思っています。

【usagingen 平井伸一・絵美】

ボランティア日和

美術館ボランティア合同研修会

小中学生のグループ鑑賞をサポートする活動は、「作品をよく見て、感じて、考えて、自分の言葉で話して、仲間の意見を聞く」事を目指しています。子供たちの反応は毎回様々で試行錯誤の連続です。プラティスラヴァ世界絵本原画展の休館日に、東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館の鑑賞ガイドさんとの合同研修会があり、他の美術館はどんな風に取り組んでいるのか興味を持って参加しました。目的は、「異なるスタイルのグループ鑑賞を体験し、意見交換を通じて学ぶ事」。16 名

ずつ計 32 名が 5 グループに分かれて、2 作品ずつ計 4 作品を各 10 ～ 20 分程度鑑賞しました。

千葉市美術館では、事前に学芸員さんのレクチャー、作品を鑑賞しながらの学習会があります。私はそれらを参考に、原画を見、絵本・図録を読んで作品を選びました。まずじっくり見る時間を取り、描かれている人物・情景・時代・技法について質問しながら進めて行き、最後は 3 枚の原画からそれぞれ好きな作品を選び気に入った点などを話してもらいました。

損保ジャパンの方は展覧会場で初めて見た 1 枚の原画に集中し、「何が描いてある?どんな表情に見える?」とすぐに質問を始めました。多くの質問に私達が見たまま感じたままを答えながら進んで行き、最後は題名を考えました。予備知識なしに初めて作品を見る子供達と同じ目線で進め、ガイド役に徹する方法だと感じました。

質問力を磨き、マンネリに陥らない為にもアプローチの仕方が異なるグループ鑑賞を体験出来たのは新鮮でした。また子供の立場でリーダーの発

言や表情を観察する機会にもなりました。充実した楽しい鑑賞のサポート目指して、今後の活動の参考にしたいと思います。

【美術館ボランティア 椎名美貴子】



千葉市美術館 8 階展示室にて 合同研修会の様子